

# 希望

小川未明

青空文庫



夏の晩方のことでした。一人の青年が、がけの上に腰を下ろして、海をながめていました。

日の光が、直射したときは、海は銀色にかがやいていたが、日が傾くにつれて、濃い青みをましてだんだん黄昏に近づくと、紫色におおてみえるのでありました。海は、一つの大きな、不思議な美しい花輪であります。青年は、口笛を吹いて、刻々に変化してゆく、自然の惑わしい、美しい景色に見とれていました。

「昨夜も同じ夢を見た。はじめは白鳥が、小さな翼を金色にかがやかして、空を飛んでくるように思えた。それが私を迎えにきた船だったのだ。」

青年は、だれか知らぬが、海のかなたから自分を迎えにくるものがあるような気がしました。そして、それが、もう長い間の信仰でありました。この不自由な、醜い、矛盾と焦燥と欠乏と腹立たしさの、現実の生活から、解放される日は、そのときであるような気がしたのです。

「おれは、こんな形のない空想をいだいて、一生終わるのでないかしらん。いやそうでない。一度は、だれの身の上にもみるように、未知の幸福がやってくるのだ。人間の

一生が、おとぎばなしなのだから。」

彼は、ロマンチックな恋を想像しました。また、あるときは、思わぬ知遇を得て、榮達する自分の姿を目に描きました。そして、毎日このがけの上の、黄昏の一時は、青年にとつてかぎりない幸福の時間だったのであります。

奇蹟が、あらわれるときは、かつて警告というようなものはありません。そして、それは、やはり、こうした、ふだんの日にあらわれたにちがいありません。

青年は、今日もまた空想にふけりながら、沖をながめていました。ふと、その口笛は止まって、瞳は水平線の一点に、びょうのように、打ちつけられたのです。いましも、金色に縁どられた雲の間から、一そうの銀色の船が、星のように見えました。そして、その船には、常夏の花のような、赤い旗がひらひらとしていました。

「あの船だ！」

青年は、夢の中で見た船を思い出しました。とうとう、幻が現実となつたのです。そして幸福が、刻々に、自分に向かつて近づいてくるのであります。

見ていると、銀色の小舟は、波打ちぎわにこいできました。入り陽が、赤い花卉に燃えついたように、旗の色がかがやいて、ちやうど風がなかつたので、旗は、だらりと垂れ

ていました。船ふねの中で、合図あいずをしていよう思おもわれました。彼かれは、かけをおりようかと思おもいましたが、ほんとうに、自分じぶんを迎むかえにきてくれたのなら、何人なにびとか、ここまでやってくるにちがいない。すべて、運命うんめいや奇蹟きせきというものは、そうなければならぬものだと考かんがえられたからであります。

それで、彼かれは、じつとして見守みまもつていました。船ふねから、人ひとがおおりて、汀みぎわを歩いて、小ちいな箱はこを波なみのとどかない砂すなの上うえにおろしました。そして、その人影ひとかげは、ふたたび船ふねにもどると音おともなく、船ふねはどこへともなく去さってしまつたのです。

青年せいねんは、赤あかい旗はたが、黄たそがれ昏うみの海うみに、消きえるのを見送みおくつていました。まったく見みえなくなつてから、彼かれはかけからおりたのであります。砂すなの上うえに、ただ一つ、黙だまつて置おかれてい、小ちいな箱はこの方ほうに向むかつて歩あるきました。小ちいな黒くろい箱はこは、すぐ近ちかくになりました。このとき、思おもいがけなく、白しろいひげをのばした老人ろうじんが、そばから、青年せいねんに呼よびかけたのです。

「若いわかの、あの箱はこを拾ひろう勇気ゆうきがあるかの。」

おじいさんの言葉ことばは、なんとなく、意味いみありげでした。

この刹那せつな、青年せいねんの頭あたまのうちには、幸福こうふくと正反对せいはいんたいの死しということがひらめいたので

した。

「おれは、まだ死んではならない。もうすこしで、あぶないものをつかむところだった！」  
彼は、せつかく、箱に近づいたかかとを、後方に引き返しました。ふり向くと、夕闇  
の中に、老人の姿は消えて、黒い箱だけが、いつまでも砂の上にとじとじとしていました。  
夜中に、目をさますと、すさまじいあらしでした。海は、ゴウゴウと鳴っていました。  
青年は、待ちに待った船が、遠くから持つてきてくれた箱のことを思い出しました。

「あの箱の中には、なにがはいつていたろう？」

夜の明けるのを待ちました。やがて、あらしの名残をとめた、鉛色の朝となりました。  
浜辺にいつてみると、すでに箱は波にさらわれたか、なんの跡形も残っていません。

その後青年は、この話を人にしました。

「君は、夢を見たのだ。」と、だれも信じてくれませんでした。そのうちに、彼の青春も去ってしまつたのであります。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「希望《きぼう》」となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 希望

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>